

はしがき

以下に掲げる物語は、主として二組の、個々に進められる文通において綴られた、一連の書簡の形式によって語られている。

つまり、互いに変わることのない友情を温め合い、ただ単に楽しみとしてばかりではなく、一般家庭ごとごとくにとつて多少なりとも関わりのある、極めて興味深い話題に関しても筆を執っている、志操堅固な二人の若い淑女が交わした往復書簡、ならびに、

自由気ままな生活を送る二人の紳士間の往復書簡であり、これら紳士の一方は権謀術数の才を誇りとし、奸智に長けた頭脳と断固不動の心に秘めた企みのすべてを、もう一方の紳士に密かに打ち明けているのである。

ただ、臆面もなく綴られているほうの書簡ゆえに、若者たちの品行に及ぼす害悪のことを懸念なさる方々のために、ここで次の点を指摘しておくのが適當であろう。つまり、二人の紳士は、こと女性に関しては放蕩者を公言して憚らず、いったん掌中にした女性に対しては、どこのだれであれ、誠意ある態度など一切取らないことを主義の一つとしているのであるが、彼らとて邪宗の徒でもなければ、瀆神の輩でもなく、ましてや、自分たちのことを、人間関係の支えとなる、その他諸々の徳目さえも遵守する必要のない存在のように考えているわけではない、ということである。

それどころか、この紳士たちは、作品の進展につれて明らかになるはずであるが、来世における因果応報に不信の念を抱かず、いずれは心改めようと考えている、そんな思慮分別を備えた人間が口にはせぬにはいないような意見の数々を、相手に向かって極めて頻繁に吐露しているのであり、また、各々が自分自身と自らの行動に関して述べてもいるのである。実際、二人のうちの一人は回心を遂げており、そのことにより、相手の陽気な筆遣いと軽薄な精神とに由来する不躰な言動に非を唱える機会を用意しているわけである。

しかしながら、相手の紳士にしても、腹心の友に胸中を打ち明けるに際しては、大方の嫌悪の情を誘うに十分な非道さを露にしているとはいえず、言葉遣いにせよ身形にせよ、一定の品位を保っているのである。これは、昨今の一部著名作家たちの作品すべてに共通に見られる事情とは必ずしも言い難いようである。その主題にしても登場人物にしても、これら作家たちの野放図な仕事を正当化するに足るものとは認め難いということである。

若い二人の淑女が認めた書簡に見出されるものは、美德と宗教の崇高この上ない教えを身に備えた者たちの間で展開される、道理に適い、かつ、実践可能な交友関係の、その最善の姿であろうと考えられるのであるが、それだけには止まらず、こまやかな心遣いの籠もった所見、特に男性観の繊細さ、さらには、二人の友情の基本原則として、双方が腹藏なく咎めるべきところは咎め、褒めるべきところは褒め、互いに正しい道を示し合うという、公明正大さの実例の数々も、折に触れて散見されるのである。そしてこれらは、女性読者の（とりわけ）若年層には遵守いただくよう、強く推奨されるべき点なのである。

この若い淑女二人のうち、主要な役割を演じている者は、女性の模範として提示されて

いるのである。すべての点で完全無欠とは言えないとしても、この女性が婦徳の鑑たることに何らの異議もないはずである。以下の事柄を読者に知らしめるためだけにせよ、彼女が某かの欠点を持ち合わせていることは自然であり、かつまた、必要なことでもあったのである。すなわち、彼女は天晴れにも己を疑い、責め、自らも納得する叱責の言葉を、利己心とは無縁なその胸に銘記するに止まらず、ついには、他のだれ一人として赦免を与えようとしない者たちに対し、崇め敬うべき存在なるがゆえに、その罪を不問に付すに至ってさえいるということである。しかも、この女性の罪過とされているものは、弱い心とか恥ずべき心から生じたのではなく、その者たちのさらに重大な落ち度に起因するものだったのである。対処しなくてはいけなかった相手を考えるなら、それも、三世の縁に結ばれた人々であることを考慮するならば、この女性こそは、人間すべてに本来的に備わる弱さと矛盾を来さない範囲で、そして、力の及ぶかぎりにおいて、完全無欠な人物だということである。仮に、一点の非の打ち所もない人物であったとしたなら、神の恩寵も罪の清めも意義を失い、われわれとしても、女性というよりは天使の姿を思い浮かべることになるであろう。事実、彼女は件の紳士からしばしば天使と称えられているのだが、この男にとっては、はなはだしく心が墮落していたため、試練と誘惑とに出会うたびに輝きを放つこの女性の貞潔さが、およそ人間業とは思われなかったというわけである。

四人の主要人物の他にも数名の人物が導入されており、それぞれに特徴ある文面を認めている。それらの手紙の一部には、読者の娯楽や気晴らしになると同時に、警告ともなれば教訓ともなるような、快活でいたずらっぽく、おどけた筆致が見出されることと思われるが、とりわけ、男性では主要人物の文面、そして、女性の中では、二番手に位置する人物の文面にそれは窺われることだろう。

すべての手紙は、書き手が自分の扱う話題にすっかり心奪われているように思われる時点（この時点に於いては、通常、事件の成り行きは定かでない）で綴られているのであるが、そのため、重大局面のみならず、〈即時描写〉と呼ばれて構わないものや、〈若年の読者が肝に銘じて然るべき〉所見、さらには、心を打つ会話の数々が文面に溢れるわけである。そして、それら会話の多くのものは対話形式により、つまり、ドラマ仕立てで綴られているのである。

主要人物の一人が述べていることであるが（第七巻、五十七頁）、「目下の苦難をその最中であって筆にする者たちの文体は、先が見えないことの苦しさに（その時点では、出来事が未だ運命の胎内に潜んだままのため）心を苛まれているわけでもあり、はるかに生彩に溢れ、また、心打つものとならずにはおかないのだ。すでに乗り越えてしまった困難や危険のことについて語る人物が用いる、無味乾燥で叙述的な、生気に乏しい文体に比べてだが、そちらのほうの語り手は、まったく何の心配もないわけだからな。それに、語り手自身が自分の物語に感動するところがないとすれば、読み手の心を強く動かすようなことはありそうもない話」なのである。

以下の作品において特段に意図されているように思われるのは、上辺を繕って事を謀る異性の卑劣な手管や企みに対し、軽率で無思慮な者に警告を発することであり、結婚という重大事に臨んで、我が子に対する生得の権限を過度に振り回すことのなきよう両親に忠告し、子に対しては、「心改めた放蕩児が最高の夫になる」という、物騒でありながらあまりにも広く世間に受け入れられている例の考えに基づき、正直者よりも道楽者のほうを好

む姿勢を戒めることであろう。しかし、何にもまして肝心なのは、道徳のみならずキリスト教の至高にして最重要な教義について、尊敬すべき人物の行いの中で実践に移されている様子を例示しつつ検証することなのである。一方、それらの教えをないがしろにする不徳の輩は分相応に、そして、いわば当然の結果として、罰を与えられているのである。

思慮深い読者ならば、以上の言葉を念頭に置く時、ただ気晴らしや娯楽のためにのみ構想されたものとして、眼前の作品の吟味に取り掛かることはないはずである。一方、軽薄な小説とかくだらないロマンスとかを期待して本書に目を通し、そのストーリーを（これが興味津々たるものであることは大方の認めるところであるが）教訓を伝えるための手段というよりは、むしろ、本書の唯一の目的であると考えような者すべてにとっては、本書は退屈な長談義と思われることであろう。

今回の版に関し、次の点に触れておくのが適當であろう。つまり、単に短縮を図ったことであつたが、先の版では割愛されることとなつた、そして、本作品を支持する一部の人が必要かつ興味深いものとおおえになつた多くの章句、ならびに、数通の手紙を復元するのが妥當であるとの判断に至つたということである。これらの部分は小点を、すなわち、終止符を逆様にしたものを付すことで区別されている。また、以前の版を購入された方々への公平さを考え、別途印刷の予定となつている。

特に年配の読者や視力の弱い一部の方々からは、最後の三巻の教箇所において用いられた活字の小ささに関して、お咎めをいただいたこともあり（望ましからざる長さに膨れ上がった本作品を、出来るかぎり嵩張らないものにするための処置であつたが）、今回の版では一貫して、以前使用された、例の三巻の大きめの文字で印刷されている。しかし、このために、前述した追加の件もあり、やむなく七巻本を八巻に印刷した次第である。

元来、本作品は三回に分けて刊行されており、一回目の刊行と二回目の刊行との間には意図した以上に長い時間が経過したこともあつて、二回目の刊行となる第三、四巻に（はしがき）を添えるのが適當との判断がなされたのである。極めて博学にして高名なるお方が、編集者の求めに応じ、親切にも（はしがき）をご用意くださったのである。しかしながら、（はしがき）を挿入すべき理由は一時的なものであり、その扱いについては編集者の一存に委ねられていたこともあつて、作品全編が一度に印刷されることとなつた第二版においては、（はしがき）は割愛されたのである。また、第一巻に付した（はしがき）についても、同じ理由から割愛され、両者の代わりに、読者向けの短い告知が挿入されたのである。その告知もまた一時的なものであるため、読者へのこのご挨拶が代わりに用いられた次第である。

第二版においては、作品全編の詳細な目次が第一巻冒頭に置かれている。しかし、それは結末をある程度予告していたし、読者が物語に入るのをあまりにも長く引き止めるように考えられたため、各巻個別の目次をそれぞれの巻に（前置するよりはむしろ）追加するのが適當との判断に至つたのである。これは各巻に含まれる最も重要な部分の索引としてのみならず、簡略な要約としても役立つであろうし、読了した巻と次の巻とを読者が頭の中で結び合わせるのを可能してくれることだろう。また、個々の文通者の人柄や見解をより明瞭に表示することにもなるのである。

創意豊かな一紳士が、この物語に見られる道徳的ならびに教育的な所感の多くのものをお集めになり、ご惠贈くださったこともあり、編集者としては、それを（大幅に増補した

上で)最終巻の末尾に挿入すること以上に、本作品の意図と有用性が鮮烈に提示される方は有り得ないと考えた次第である。従って、読者も巻末において目にされるとおり、その集大成は適宜項目別に整理されており、各文通者の実践に移されるか、あるいは、男女を問わず、若者にとつて有益な理論として彼らによって推奨されるか、そのいずれかの形で、それぞれの警告、警句、意見、ないしは所感が見出されるページについての指示も添えられているのである。

個々の状況におけるヒロインの振舞いに関しては、予期されるとおり、人によりそれぞれ見解は異なっている。そして、尊敬すべき人々の中には、物語の大団円とその他数箇所に対して異議を唱えられた方も数名おられるのである。これらのうち、重要と思われるものすべてについては、物語の結末で(あとがき)として取り上げることにはしたい。本書が生活と習俗の一記録として世に問われたものである以上、手本としての効力を持つことが企図されている部分については、作品全体の構想や人間性と矛盾しない程度に、異論の余地のないものでなければならぬからである。